24）金匱要略と舌診についての考察

Studies on the Tongue Diagnosis in "Jin kui yao lue"

医の博物館　○西巻明彦，陶　粟嫻

Akihiko Nishimaki, Suxian Tao, *Museum of Medicine and Dentistry*

『金匱要略』は，古来から『傷寒論』と一対の書といわれ，『傷寒論』が急性熱病を記しているのに対し，『金匱要略』は種々の雑病つまり慢性疾患について記載されている．『金匱要略』は，『傷寒論』と同じ後漢末（3世紀初め）の張仲景とされているが，本書の成立は，複雑である．『傷寒論』の序文に，「傷寒と雑病の論，合わせて一六巻を作った」と記されていることから，『傷寒雑病論』という書の熱病編が『傷寒論』，雑病編が『金匱要略』に分かれた考え方が一般的である．しかし，小曽戸洋氏は，「張仲景の作った原書は，古くは『張仲景方』もしくはそれに類した名称で呼ばれていたと判断される．『傷寒雑病論』などといった名称は，古い時代の記録には決して見られない．この『張仲景方』は撰述後いくばくもないうちに異本を生じたらしい．すなわち内容は傷寒の治方を論じた部分と，雑病の治方を論じた部分があり，これらを一緒にしたテキストや，あるいは別々にしたものなど，様々の巻数をもつテキストが現われた．」と述べ，「従来，しばしば王叔和が『傷寒雑病論』を『傷寒論』と『金匱要略』の二書を分割して撰次したかのように解するむきもあるが，これは当を得ない．」と記している．

医書を印刷出版したのは，北宋代からで，さらに宋の歴代皇帝は医療政策を重視し，同時に印刷技術を使って国家事業として医書を校刊した．『金匱要略』は，治平三年（1066年）印刷され，これは，『傷寒論』，『金匱玉函経』に経ぐものである．もともと『金匱要略』は，翰林学士の王洙が，図書館の中から，虫食いのある『仲景金匱玉函要略方』三巻の書を発見したことに由来する．この書は，上巻は傷寒，中巻雑病，下巻は処方内容と婦人病が記され，これを実際に臨床で試してみると，治療に有効であることが判明した．そこで，この書を出版することになるのだが，林億らは，まず上巻の傷寒は削除し，中巻と下巻とをひとつにまとめ処方の記述を関連条文化に配置し，欠文を他方の医書から佚文として採取し，附方として補った．このことは，『金匱要略』は，張仲景の原典ではなく，林億らが，『仲景金匱玉函要略方』をもとに北宋代に再構成した書と考えるべきである．

現在，『金匱要略』の初版本はすでに失なわれ，宋代の刊本は現存していない．現存している『金匱要略』は，元明の版本で，① 鄧珍本，② 無名氏本，③ 兪橋本，④ 趙開美本，⑤ 呉勉学本の五書が存在する．この中で趙開美本は，万暦二十七年（1599）に趙開美が自ら編集した『仲景全書』の中にみられる．この『仲景全書』は，『傷寒論』，『注解傷寒論』，『傷寒類証』，『金匱要略』の四書から構成されている．日本においては，国立公文書館内閣文庫に存在する．

このように，『金匱要略』はかならずしも張仲景の原典そのものではないが，ある程度，張仲景の概念は継承していると考えることができる．今回，趙開美本をもとに，舌診の条文を集め，舌診に対する考察を行った．